

---

# くまさんと椿。

笈川シロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くまさんと椿。

### 【Nコード】

N6010H

### 【作者名】

笈川シロ

### 【あらすじ】

椿の花がすべて枯れるその前に、熊は少女に「いつまでも寄り添う」と誓われなければならなかった。だが椿の時期が過ぎるときになって、少女が「一度家に戻りたい」といいたして。『和風・美女と野獣』がコンセプトな、大正時代のお話です。

これは本来ならあつてはならないこと。それを犯すということなら、それなりの制約を受けて頂きます。

(……上等だ。)

『彼女』はこの椿たちが蕾をつけるころ、やって来るでしょう。其の花が枯れるまでに『彼女』がいつまでも貴方に寄り添うと誓うならば、貴方は元の姿に戻り、願いも叶います。

(もしも、無理だったら?)

その時は、貴方は永遠にその恐ろしい姿のまま、人々に『鬼』と蔑まれ、恐れられながら生きてゆかねばなりません。もちろんそうなれば、もう『彼女』とは会えなくなります。それでも、よいのですね?

(ああ)

ならばその願い、叶えましょう。

\*

くまさんと出会ったときはまだ蕾もまばらだった椿が、どんとんと花を咲かせ始めた。

そんな庭先の様子を眺めながら、もうそんなに一緒にいるのか、

と考え、同時にまだそれだけしか同じ時間を過ごしていないのか、とも思う。

くまさんと暮らし始めてから、そろそろ百日になっていた。

「巫女よ」

別に巫女服を着ているわけでもないのに、くまさんには出会った時からそう呼ばれていた。いくら話を通じようと、彼はあくまで熊だ。もしかしたら、この人（熊）のなかでは『神社にいる女性』はすべて『巫女』なのかもしれない。

自分は巫女ではない。

はじめのうちは何度もそう訂正を要求したものだが、くまさんは軽く笑ってまともに相手をしてくれなかった。

「なんでしよう、くまさん」

結局巫女が折れ、微笑み応対する現在に至っている。

街では『ラヂオ』なんてものが出来ているらしいこのご時世。

にもかかわらず、巫女が生まれ育った村では山奥の古びた神社には鬼が住んでいる、という伝承がまだ信じられていた。

儀式的なものだが、今でも毎年椿の花が咲く前に村の娘を一人、すでに無人となった神社に生け贄として捧げるのだ。

もちろん儀式なのだから、今まで帰ってこなかった娘はいない。

だが今年の生け贄である巫女は、椿が咲き始めても村へ戻ろうとはしなかった。

今日もいつものように海老茶袴にたすきを掛けて、庭の椿に水をやり、朝ご飯を作って、掃除をして。そしていつものように縁側で一息つく。

そんな巫女に、くまさんはくまさんで毎日のように訊いてきた。

「貴女は家に帰りたいと思わないのか？」

その度に巫女は微笑んで見せた。

「ちょうど何故自分の事を巫女と呼ぶのか、と訊いたときに、くま

さんがただただ静かに笑っていたように。

ごまかされている自覚はある。ごまかしている自覚もある。

お互いがお互いにすべてを見せず、それで不安がない訳ではないけれど、

家に帰りたくはないか？

毎度毎度のその質問には、いつだって不安の色しか浮かんでいなかった。

少しでもそれが消えるのなら。余計な心配が減るのなら。理由の中にそういった気持ちがあるのも事実なのだ。

少なくとも、自分の方は。

「ただ」

だから、そう切り出したのは今回が初めてである。

「残してきた祖母が、それだけが気がかりなの。くまさん、一度だけでいいんです。家に帰してもらえませんか？」

これ以上先延ばしにしたらきつともう頼めなくなる。頼む事が後ろめたくなる。そう思っていたことだった。

「そう、なのか」

案の定くまさんは驚いた。

少しの間考え込んで、その大きな手で巫女の頬をそっと、体格差を考えればびっくりするぐらい絶妙な加減で包み込んだあと、なぜか庭の方　椿が咲いているあたりを見つめてから、

「……行っておいで。お祖母さんによろしくな」

巫女に向きなおりそう言った。

その口元が笑っているのは確かなのに、なんだかこっちが泣きなくなるような笑顔で。

「ありがとう」

そう言って逃げるように立ち去るしか、彼女にはできなかった。

「いいのか？」

いつの間にか来ていた小柄な狼 やまがみ 山神が尋ねると、くまさんは硬い声で答えた。

「ああ。あの娘は何も憶えていない。もう、『私の』巫女じゃないんだ」

視線は巫女を見送ったついさっきのままだ。

くまさんだつて彼女を疑いたいわけではない。だが今になって身内の事情を訴えられたのでは 今まで神社から離れた気配もないとあつてはなおさら、どうしてもそれは下手な口実に聞こえてしまふ。

「それもあるがな、今は椿の方だ。アレもそろそろ限界だぞ」

やはり付き合いの長さだろうか、山神もそのあたりにはあえて触れようとはしない。

「それよか、いつまでそんなカツコでいるつもりだよ。貴方サマともあろうお方が」

かといって容赦というものも持ち合わせてはいないのだが。

くまさんは軽くその金色の頭をはたくと、諦めたように薄く笑う。

「いいさ、五十年間この姿でいたんだ」

それに今さら元に戻ったところで。

くまさんはやけに人間くさく眼を細め、ぼんやりと、しかし睨むように空を見上げた。

「そーかい」

それだけ言つて、狼は熊の横にしゃがみこむ。そして同じように今にも一雨降りそうな、真黒い雲におおわれた空に目をやった。

その目も同じように険しい。

「私もこの国では新参者だからな」

そう呟き、くまさんは自分の拳をぎゅうと握りしめた。

やはり雨は音を立てて降って来た。この分だと、嵐ぐらいのものにはなるかもしれない。

すでに山神も自分の住処へ帰っている。

知らず知らずのうちに、くまさんの口からはため息が漏れた。

本当はどこにもやりたくなかった。この熊にとって少女は、長い間待ち続けてやっと見つけた、最愛の人なのだ。

だが引き留める事は出来なかった。

向こうは何も知らない。そしてくまさんだって、今の彼女の事情は何一つ分らない。

今の二人の間に、引き留めるだけの理由は何もなかったのだ。

ふいに、巫女と出会った頃を思い出した。

少女は熊が喋ることに厭いとわず、狼のことはあくまで犬っころだと思い可愛がって。気にしていたのは何故熊が自分を「巫女」と呼ぶのか、とかそんなことで、結局その答えを教えることは叶わなかった。

お前が言ったんだよ、そう呼べって。

今では声も見た目も違う彼女は、もうそれも忘れてしまっているのだろう。

それでいい。くまさんは自分の胸に手をやった。

巫女が笑った。うれしいと感じるのは自分だけで十分だ。たこの場所。こんな思いをするのは自分だけで十分だ。

山神は、椿はもう限界だと言っていた。けれど自身の方が、ずっと限界かもしれない。

雨はいっそう強くなり、止もうとはしなかった。

嵐は五日たった今でも、雨を降らせつづけている。

「よう、巫女サンは戻ってきたかい？ ……まだだな、その様子じやあ。お前、あれから何も食ってないだろう」

もう声を出す気力も無いくまさんは軽く首を上下させ、それを返事とした。

たとえ巫女に戻る意思があっても、嵐が止む頃には椿はすべて枯れている。

そう悟った時から、くまさんは熊として生きるための行為をほとんど放棄してしまっていた。そんな事しても熊としての一生が終わるだけで、何になる訳でもない事はくまさんも分かっている。

けれど巫女がいないなら かつて愛した人と会えないなら、わざわざこんな姿でここに留まる意味はくまさんにはなかったのだ。

「もう私の巫女じゃないーとか言ってたクセに、お前も未練たらたらだな」

山神の憎まれ口にも全くの無反応で、これまた随分なすさみようである。そんなくまさんに山神は、やれやれと言わんばかりにふう、とため息をつく。

「ま、終わるだけが関係性ってモンじゃ無いしな」

そして妙に意味深な言葉を残し、山神は早々に帰ってしまった。

と、何かが落ちる音がした気がして庭の方を向いたくまさんは、地面に落ちた最後の花を見つけた。

すつと目を閉じる熊。

これでもう、ここに用事はないな。

だがそう思った瞬間、懐かしい たった五日離れただけでそうと感じる声が聞こえた。

「くまさん！」

彼女はこんな雨の中で、傘も差さずに駆けてくる。くまさんはいえは驚くよりも啞然として、ぽつりと呟くようにその名を呼んだ。

「巫女……？」

さらに巫女が椿の前を通り過ぎると、あるはずのない蕾がぷくり

と膨らんだ。信じられないことに蕾はそのまま成長し、小ぶりながらも見事な花を咲かせる。

「服が濡れてるぞ」

訊きたい事がありすぎて結局そんなことしか言えないでいるくまさんに、巫女は相変わらざるの笑顔を見せた。

「これぐらい、平気ですよ。おばあちゃんも大した事なさそうです…、良かったです」

「巫女、なぜ貴女のお祖母さんが、調子が悪いと分かったのだ？」  
ようやく言葉になった一番の疑問に、巫女はあっさりと答えをくれた。

「ああ、ヤマガミさんがちよくちよく様子を見に行ってくれてたんですよ。聞いてませんでしたか？」

あの狼<sup>ヤロウ</sup>。心の中でくまさんは憮然と毒づいた。

さては逃げたか、はたまた気を利かせたか、とつくに山神の姿は見えない。でもまあ今回はいいだろう。

時間を巻き戻すことはできない。命だって、やり直しがきくものではない。

けれどこの関係は変えられる。もう一度、はじめから。

たった一輪、この椿がつかぬはずの蕾をつけた時、『彼女』は再びやって来たのだから。

懐かしいと感じたのは、五十年前に対してではなかった。今となつてはただ目の前の巫女がすべてだ。

もう離さない。この花が枯れるまで　いや、枯れてからもずっと。うつすらと太陽が顔を出した。そろそろ嵐も止むだろう。

古びた神社の境内で、熊が少女を抱き寄せる。

「帰ってこないかと思った」

巫女の笑顔を見ても、もう辛いとは思わなかった。

「あら。そんなつもりなら、最初からこんな山奥に住みつきません

「よ

「そつだな」

彼女がそつ答える事は、はじめから知っていた気がした。

ある春の、昼下がりのことだった。

(後書き)

ちなみにお題は「ファンタジー」でした。……かすりもしてませんね(苦笑)。

もう少し仏教の勉強をしたら(あと人気があれば)、続編を書くかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6010h/>

---

くまさんと椿。

2010年10月8日14時32分発行